

佐世保上陸後、検疫が行われました。その後岸壁の屋台で、家族そろって熱いうどんを食べたときの味は、忘れられません。これこそ日本の味だったのです。夢にまで見た奈良の家に着いたときには、思わず玄関にへなへなと座りこみました。

奈良では、両親をはじめ親族その他の方々の温かい懐の中で生活することができ、今日まで幸福に過ごせたことを感謝するのみです。

あの悲惨な逃避行で、日本の土を踏むことなく亡くなられた多数の方々のことを思うとき、断腸の思いで胸が詰まります。

戦後五十余年、もはや戦後ではないと言われる時代においても、まだ中国残留孤児の話を目にするとき心が痛む思いです。この気持ちは実際にあの苦労を経験した人でなければ分からないことです。

日本は現在、平和・飽食の時代と言われていますが、まだ世界のどこかでは争いごとが絶えません。世界から争いが無くなり、人々から悲しみ苦しみが去って、初めて世界平和がくるのです。果たして、いつその日

がやってくるのでしょうか。

黄塵万丈の蒙古風に吹かれて

神奈川県 藤井彰治

心に刻まれた深い傷

戦後五十余年もたち、終戦当時とは、文字どおり隔世の感がある現在、おぼろげな記憶をたどってみると、あの終戦当時の絶望感と苦難な引揚げ、そして生活再建への荊いばしの道など、今も心に刻まれた深い傷がある。それらを回顧することは、あたかも死んだ子供の歳を数えるようなもので、うたた今昔の感に堪えないものがある。

本当は、今更ながらだれにも話したくない気持ちである。しかし、それが自己の過去における生活の真実であり、民族の語り継ぐべき歴史のひとつであるとするならば、後世への語り草としてあえて筆を執った次第である。

青雲の志を抱いて満州へ

私は、明治四十五年二月、新潟県上越市の農家の四男として生まれ、旧制県立高田中学校から高田師範学校本科、同じく専攻科を卒業して、数年間、地元で小学校教師をしていたが、当時の満州ブームにあこがれて、父母の反対を押し切って、履歴書を大連にあった関東州庁に提出した。成績や家庭条件など、相当に難しい関門があったが、幸いに採用された。

半年後の、昭和十二年二月八日に「関東局へ出向を命ずる。」の辞令を手にし、青雲の志を抱いて勇躍渡満した。当時は、まだ満鉄が付属地行政権を保持しており、内地からの教員の採用は、満鉄と関東局の二本立てであった。

こうして落ち着いた先は、満州で一番古い日本人学校の旅順第一尋常高等小学校（明治三十九年創立）であった。校舎は、元ロシア軍の兵営といわれ、赤レンガの三階建て、朝な夕なに近くは白玉山、遠くは爾靈山（二〇三高地）を仰ぎ、眼下に旅順港口を見下ろす丘の上にあった。

旅順は周知のように日露戦争（明治三十七、八年）の激戦地で、前面には軍港と商港を擁し、背後には二〇三高地をはじめ東鶏冠山、二龍山、盤龍山、松樹山等の山々を連ねるロシア軍の要塞であった。乃木将軍の率いる日本軍とステッセル將軍麾下のロシア軍が、半年余にわたり祖国の興亡をかけて戦った所である。戦蹟の山々には当時ロシア軍が築いたベトンの深い塹壕が今もそのまま残っているという。旅順の街は龍河を挟んで新市街と旧市街に分かれ、中間の白玉山山頂には日本軍戦死者二万余柱の英霊を祀る表忠塔が空高くそびえていた。

旅順には六年余り住んだが、その間官舎が支給され、俸給も内地の七割五分増しで生活には恵まれていた。若干の貯金や内地の親元への送金もできた。家内も野菜市場への往復に洋車（人力車）を使っていた。私の長男も次男も、この旅順生まれである。おそらく自分の生涯を通じて最も恵まれた時代であったと思う。

旅順の小学校では、六年生女子組を二回担当し、その教え子たちが今でも毎年クラス会を開くたびに私を

招待してくれる。彼女らもすでに七十歳すぎ、私はその人間関係の尊さをしみじみと噛みしめている。

中国語の猛勉強

私は渡満して、翌年に中国語の勉強を思い立ち、生来の学究的な性格もあって、がむしゃらに勉強を始めた。毎朝出勤前に、当時旅順工科大学の講師として北京から来ていた林景文先生を自宅に招き、中国語発音の基礎をみっちり勉強するとともに、夜は旅順語学校に通って渡会貞輔先生（語学検定試験委員）らのご指導を受けた。

検定試験三等に合格したこともあって、昭和十五年秋、関東局留学生として北京へ派遣された。同僚の金州公学堂教諭の原田君と二人で騰写版筆耕のアルバイトをしながら頑張った。というのは、給料は留守宅の妻の方に行き、私の方には月六十円の留学手当しか来なかったからだ。六十円では生活費がやっと、学費は家からの手持金で賄った。その後先輩のお世話で、北京市の日本語講習所の夜学講師にしてもらい、ようやく二人で一杯やる余裕ができた。昭和十六年秋旅順へ

帰任し、水師宮公学堂教諭として中国人学生を教えることになった。

北京へ留学したのが縁となって、先輩の勧めで昭和十八年春教職を辞し、再度北京へ出直し、満鉄の姉妹会社である華北交通（満鉄北支事務局が昭和十四年に独立）に入社、北京鉄道局に奉職することになった。

私は教員出身なので、とりあえず会社の経営する中国人従業員子弟を養成する北京西城扶輪学校教員として赴任した。華北交通は日本人社員四万余、中国人社員十一万余を数える総合的国策会社で、戦時中はほとんど軍と一体であった。

私は、昭和十九年頃までに満州で、関東局、華北交通、日本政府文部省施行のそれぞれの中国語検定試験の一等に合格していた。しかし机の上の勉強だけではあまり実際の役に立たないことを痛感した。そこで中国人社会の各層の人たちとできるだけ接触し、下層社会の下品な言葉、地方の土語なども習得するよう努力した。

濟南鐵道局人事課へ転勤

昭和二十年を迎えた頃は、戦局は日増しに不利となり、人びとの顔には、言わず語らずのうちに最悪の場合を予想してか、不安と陰うつな色が漂い始めた。

この年の三月初め、私は突然山東省の濟南鐵道局人事課へ転勤を命じられた。理由はあとで判明したが、戦況の不利とともに日本人社員がどしどし赤紙一枚で応召し、もはや内地からも満鉄からも人を採用できなくなったため、そのあとをどうしても中国人社員で埋めなければならなくなった。しかし、現場の責任者である三人や五人の日本人、それは駅長、保線区長、貨物主任、機関区長、運転指令といった人々だが、何十人という中国人の部下を掌握できない。彼らを指導しようとしてもうまく言葉ができない。軍事輸送の貨物列車があちこちで爆破される。八路军（中共軍の前身）の送り込んできたスパイ社員によって情報は敵地区へ筒抜けとなる。何としても北京局から中国語のできる日本人と、忠誠心厚く信頼できる中国人を至急回して欲しいという、濟南鐵道局片瀨局長（旅順工大卒）の

強い要請があったからだ。私は家族を北京の社宅に置き、三月四日、休一つで赴任した。

米軍機の鐵道工場爆破

私は濟南局総務部人事課の語学担当主任として着任した。取りあえず各職場でよく使う頻度の多い軍語や述語を調査して、日本語と中国語を対訳した『ポケット職場語学』を編纂しようと企図した。しかしそれには調査に最小限一年はかかり、二カ月や三カ月ではできないものではない。その間、日本人社員が応召で欠員の出た箇所から人事課長に対し、これこれの知識と技術のある中国人社員を回してくれと要求がある。課長は、二、三人の候補者を挙げ、私に話し合ってみてその中から選考して欲しいと言う。その重点は、技能や経験のほか、家庭の状況や思想動向を判定することである。人事課で任命してしばらくするとまた現場箇所長から電話がくる。「あの程度の間人ではダメだ！もっと質の良いのをよこせ！」と。しかしこれとは思う人物は大抵敵地区とつうつう人間である。最後は、私が現場に向いて箇所長と直接談判することになる。

その間、管内数カ所で社員の語学検定試験を行い、その結果を北京の本社に報告しなければならぬ。朝八時半出勤、夜九時すぎ帰宅という東奔西走の毎日であった。

この間、毎旦一、二回は、米軍戦闘機による空襲があり、非常ベルとともに近くの防空壕に走り込むのが日課であった。忘れもせぬ三月二十一日、米軍爆撃機B-24の大編隊が濟南鉄道工場を集中爆撃した。局員は直ちに、熊手やシャベルを持って二キロメートルほど離れた鉄道工場に駆けつけた。現場は目もあてられぬ惨憺たる状況で、直径七、八メートルの爆撃の大穴、あちこちに転がる死体、爆風でレンガ塀に貼りついた死体もあれば、樹の枝に引掛かった頭のない死体。頭と背中の一部だけで脚のない死体、盛り上がった土から頭だけが出ている死体、それはまさに子供の頃お寺で見た地獄の絵そのままであった。私たちはまだ息のありそうな負傷者を担いで近くの学校に運んだが、重傷者などは手の施しようがなく、結局、犠牲者は百数十人に上ったようである。そのうち大部分は、中国人社

員であったようだ。

八路軍の列車爆破炎上事件

北京と違って、濟南は戦争の第一線である。これは私が危うく難を逃れた最初の事件だが、昭和二十年五月七日夜、北京発青島行きの特急列車が、膠濟線張店駅近くで八路軍に爆破され、風上から火をつけられて、十一両編成の客車が煙突のようになって焼けてしまった。慌てて列車から飛び降りた乗客も、両側のトウモロコシ畑に陣取っていた八路軍から機関銃で撃たれ、多数の死傷者が出た。実は私も、この列車で青島へ出張する予定であったが、総務部長の急用で、出発を明日に延ばしてくれと言われ、一日延期したことで命拾いを見た。翌日張店駅で真っ黒に焼けたこの列車の残骸を見た。

当時、日本側の輸送力を叩くため、米軍のP-51戦闘機が三機編隊で飛来し、走行中の機関車の胴を狙って急降下、十三ミリ機関砲を浴びせた。このため機関車が蒸気を噴き出し、乗務員が大やけどをするケースがしばしばあった。機関車は、鉄道工場で応急修理を

してまた使ったが、肝心の中国人乗務員が危険を理由に乗務を拒否するようになり、私は、機関助手見習いの養成に奔走せざるを得なかった。ところが一方、進んで乗務する中国人もいた。濟南―徐州間を往復する列車は泰山付近の登り坂にかかると白軋車並みの速度となる。そこであらかじめ示し合わせていた土民数人が、麻袋を持って機関車に飛び乗ってくる。直ちに麻袋に石炭を詰め、線路脇に放り投げ、機関士に「お札」を渡して列車から飛び降りる。石炭の三トンや五トン、誰も文句を言う者はいない、もともと中国の物だからという考えであった。当時の話題の一つでもあった。

蔣介石政府の辞令で残留

いよいよ来るべき時が来た、敗戦の悲報だ。当時、私は濟南で臨時召集を受けており、米軍の中国大陸上陸に備えて、トーチカ構築作業に従事していた。終戦を聞いても別に驚きはしなかったが、この先どうなるのかとやはり不安であった。八月九日のソ連の参戦と共に、赤紙召集に切り替えられ、一度家に帰って家族

に後事を託し、出直してくるよう命じられた。ところが帰営して間もなく終戦となり、内心やれやれと安堵した。それ以後は、濟南市約八キロメートル郊外の部落に本拠を移し、八路军の急襲に対する警備に就くことになった。八路军の目標は、市近郊にあった倉庫にある膨大な軍需物資であった。

日本軍前線部隊の集結で、われわれは召集解除となり、九月十日頃軍服を着たまま帰宅した。早速職場へ出勤してみたが、日本人職員だけで中国人社員はほとんどいなかった。彼らもこの大変時に後に「漢奸」と称せられるのを避けるために、われわれの知らない苦勞があったようだ。

重慶から空路やってきた国民政府の要人たちも揃い、十月二十五日接收式が挙行された。接收委員長の陳某民は、蔣介石委員長の親戚筋とかで、特段の権威もち、十数人の委員を指揮して手際よく軍と鉄道局関係の資材を接收していった。接收式の壇上で、彼はこう宣言したことを覚えている。「日本人諸君は、これまで祖国のために忠誠を尽くしてきたのと同じ決意を以

て、今後はわが中華民国のために働いて欲しい。諸君の生命・財産と生活は誓って保証する。但し、朝鮮人軍人軍属とその家族は、四十八時間以内に退去せよ」と。その当時の朝鮮人の横暴さは彼らの目に余るものがあったようだ。

このあと私を含め二、三十人の幹部が留用の辞令をもらった。私の辞令には、「一級服務員を命ず 月給与八十五元、津浦膠濟鐵路局接收委員会」とあった。

つまり接收の事務処理のためである。当時済南市内には各地から集結した日本人（主として応召軍人の留守家族）二万数千人が学校や公会堂などに分宿し、引揚げの準備を進めていた。退去を命じられた朝鮮人が、郊外に出るや否や八路軍の略奪に遭い、再び市内に舞い戻ってきたため治安が急激に悪化し、婦女子の単独外出は危険となった。

私は通訳として、連日接收委員と共に軍と鉄道局の接收物資を検分するため各倉庫を巡った。また軍の参謀、局の責任者たちと共に中国側の何思源山東省主席（後の北京市長）、王耀武国民政府軍司令官らを何度か

訪問した。ここで一番困ったことは、南方から来た国民政府接收委員たちの言葉がよく分からなかったことである。やむなく同僚の北京人王さんに同行を願ったこともある。

私はほとんど家庭を顧みる余裕はなかった。文字通り日夜奔走した。家内は妊娠中で経過が悪く入院していた。七歳を頭に三人の子供がいるので、やむなく中国人家政婦を頼んだが、この女性はかつて資産家の二号か三号だったそうで、彼女が来てから米櫃こめびなに一杯あったお米が、またたく間に底をつくようになった。「彼女は買物に出かける時は、必ず米を二升ばかり袋に入れ、近所の中国人の店に預け、夕方帰宅する時にその袋を持って帰る」と近所の人が教えてくれた。しかしそんな家庭の些事など構ってはおれなかった。

祖国の土を目指して

明けて昭和二十一年を迎え、いよいよ懐かしの故国への引揚げが始まった。軍隊は、武装解除のあと真先に帰国してしまい、次は済南に集結していた二万数千人の邦人、そして最後は済南に居住しているわれわ

れであった。荷物は一家族、行李と布団で三十キロまでと嚴重に制限された。親から作ってもらった結婚衣装、まだ一度も手を通したことの無いのを二束三文で叩き売りに出して、泣いていた若い奥さんもいた。

わが家でも家内が無事お産をしたので、子供だけは何んとかしてと考え、布団三枚、毛布二枚、ねんねこ一枚、あとはオムツと肌着類だけで荷物をまとめた。家内は、布団の綿の中にダイヤの指輪と愛用の金時計を縫い込んだ。一週間前には、いつでも出発できる準備が整った。だが肝心の鉄道は八路軍に寸断され、復旧の見込みが立たず、遂に数百人を一団として徒歩で青島の港へ出るようになった。私は中国側に辞表を提出し帰国の許可を得た。

二十一年三月六日、三十キロの荷物を洋車に託し、子供の手をひいて駅を目指した。途中言いがかりをつける中国人ヤクザたちに千円札（連銀券）をばらまいてようやく駅に着いた。

駅のホームでは団長立ち会いで、中国側の入念な『首実験』があった。名簿の氏名、住所、職歴に照ら

して戦争中に犯罪事実が無かったかどうかを調べるのである。私共五百数十人の中で、ただ一人警務段（段は区域のこと）出身者が引つ立てられて別な所へ連れて行かれた。あとで聞いた話だが、彼は戦争中に中国人を射殺した罪で、銃殺の刑に処せられたという。

一方、荷物の検査も嚴重で、せっかく梱包した荷物をまた解き、全部毛布の上に並べた。そんなことで荷物と共に貨車の中に収まったのは、すでに午後であった。貨車の中は、身を横たえるスペースもなく、水が飲みたいと騒ぐ者、おしっこがしたいと泣き叫ぶ子供たちで、息が詰まるようであった。発車して約二時間、普集駅のあたりで列車は動かなくなった。列車のドアを開けてみんな深呼吸した。

どこの兵隊か知らないが、数人の兵士が手榴弾をぶらつかせ、メリケン粉三袋、毛布十枚、時計五個を出さないと手榴弾をぶち込むという。桜井団長が、幹部と相談してようやく要求品を調達して渡した。実は途中の工作用にと、かなりの食糧や毛布などを用意してきたのである。要求品は渡したが、列車が出ない。

聞くと機関士がこの雑軍の本部へ連行され、事情聴取を受けていたためだという。夜に入ってようやくこの貨物列車が張店駅に着いたが、そのまま車内で仮泊することとなった。

八路軍に援助を懇願

ところで、張店から先が大変な難物で、鉄道は不通で歩くほかない。ある団体は、荷馬車を二十台も雇って出発したが、途中で匪賊に全部略奪され、裸同然の乞食集団となってしまったという話を聞いた。また何日も雨で足止めされているうちに食糧が底をついてしまったという話もあった。

この先、益都から昌楽をへて濰県までは最も治安が悪く、土匪が横行するという情報なので、とても婦女子を歩かせるわけにはいかず、幹部で協議の結果、八路軍の助けを求めることになった。八路軍は、華北では日本軍最大の敵であった。

私は直ちに桜井団長と共に、街から五キロメートルほど離れた八路軍の連隊本部を訪ねた。歩哨の銃剣に促されながら恐る恐る連隊長室に入り、来意を告げて

援助を懇願した。桜井団長は、手みやげの新品時計と注射薬一箱を差し出したが、連隊長は受け取らず、日本人帰国者の病人のために使えと言おう。会谈二、三十分、連隊長はわれわれの苦境をよく理解したようであり、軍用トラック十五台と警備兵一個小隊を派遣してくれることになった。それは思いもよらぬことであり、思おもよらぬ成功でもあった。連隊長は別れ際に、「君はなかなか中国語もできるし、ひとつ俺たちの方へ飛び込んで来ないか！」と言った。私は、その好意に深謝し、固く握手して別れた。

当時の八路軍は軍紀厳正、彼らの歌にもあるとおり、「借りた物は針一本、糸一筋でも必ず返す」という厳しきであった。これが内戦で勝利を得た最大の原因であろう。

翌日、八路軍のトラック十五台と警備兵がやってきた。われわれは、男子総員でトラックの荷台に八センチ角の角材を組み、天井と側面全部に不用になった畳を針金で縛りつけて防護壁を作った。そうしないと、両側の畑の中から中国人により拳大の石を投げつけら

れるからだ。いよいよ準備完了、一台のトラックに布団袋と行李を積み、その上に女子供四十人ぐらいを詰め込み次々と出発した。男は全員徒歩で、水筒とにぎり飯だけで四時間前に出発していた。トラックは、道なき広野をもうもうたる黄塵をなびかせて走った。

地獄で仏に会う

私は、責任上徒歩隊には加わらず、最後尾の車の屋根の上にいた。益都の街に入り小休止していると、赤い房のついた拳銃と皮鞆を十文字に掛けた一人の男が、私の車の屋根に上ってきた。警備兵の小隊長であることは、一見して分かった。当時、私は中国人には絶対に日本語で話さないことにしていたが、この男どうも日本人らしい。そこで思い切って、「あなたは日本の方ではないですか？」と切り出した。相手はちよつとためらったが、「そうです、日本人です。北海道出身の野本と申します……。そのうち私も日本へ帰るつもりです」と言う。どうして八路軍に投じたかを聞きたかったが、そこまで聞いては失礼と思い、警備のお礼を述べているうちに相手は車の屋根から下りてしまっ

た。ほんの一、二分の間の奇遇であった。

先の連隊長といい、この日の警備隊長といい、まるで“地獄で仏”で、私は人生の不思議な巡り合わせにただただ感激するだけであった。おそらく野本さんは今なお北海道で健在であろう。

二度目の命拾い

昌栄をへて濰県（現在の濰坊市）に近い平原の中で、私の乗っていた木炭車が故障でストップしてしまった。運転兵が車の下にもぐり、懐中電灯を片手に修理しようとするが、なかなかエンジンがかからない。日がすっかり落ち、夕暮れの靄もろが漂う頃となった。するとどこからか部落民が雲霞のように集まり、手に手に包丁や鎌を持ち、布団袋を切り裂いて中の物を引き出すそうとする。いくら怒鳴っても相手は逃げない。このまま暗くなると極めて危険だと思った私は、数百メートル先の濰県の街を目掛けて突っ走り、街角の交差点にあった交番へ飛び込んだ。ジュラルミンのケースに詰まったタバコを交番長に投げ出し、ぜひ車の修理ができるまで警備をと懇願した。一人の巡査が鉄砲を持っ

て走ってきた。すると部落民（主として女子供だった）はクモの子を散らすように逃げてしまった。

ようやくエンジンがかかり、二、三回前後したのち、全力で瀧県の街に向けて走った。この時である。車の屋根の上にはいた私は夢中で身を伏せた。屋根の上すれすれに、アーチ型の石の門があった。古い都市の遺物である。薄暗い夕刻時で、私がこの門に気付くのが一瞬遅かったら、頭をぶつけて車から飛ばされおそらく命を失ったであろう。これが二度目の命拾いである。

アンペラ一枚で倉庫にて仮眠

瀧県では、大きな倉庫の空き屋で宿泊することになった。石畳にアンペラを敷き、その上に持参の布団を敷いて、女子供を休ませた。男たちは、軒下か街路樹の下で休むことにした。そこで困ったのは食事である。昼間なら街の店から、饅頭や焼餅を買集めることもできるが、夜八時、九時ともなれば開いている店は一軒もない。すいとんを作るにも水がどこにあるのか分からぬ。近くに井戸が一つあったが、水は、はるかに下の方に少しあるだけでとても使えない。知らない

土地ではお金を払って地元の中国人に頼むしかない。ようやくすいとんができたのは夜の十一時であった。子供たちは何も食わずに寝てしまった。赤ん坊が危篤状態になって泣いている母親もいた。

黄塵万丈、きな粉餅の顔

八路军のトラックは瀧県まで、あとは自力で歩くよりほかはなかった。みんなが持参の薬を分け合って飲み、落伍者の出ないよう気を使った。

当時は春なお浅く、大空を吼え渡る蒙古風は文字通り黄塵万丈、一寸先も見えぬほどで目も口も開けられたいものではない。誰もがきな粉餅のような顔で、泣きわめく子供をなだめながらひたすら歩く。わが家でも、妻が生後三カ月の赤ん坊を背負い、八歳の長女が三歳の次男坊の手をひき、私と六歳の長男が、食料品、水筒、医薬品、それに大事なオムツの入ったリュックサックを負うて荒野を歩き続けた。中には、死臭の漂う赤ん坊を捨て切れずに、いつまでも背負っていた母親もいた。しかも、沿道には手鉤や熊手を持った土民や土匪の群れがあちこちに待ち構えている。みんな祖国の

土を踏むまではと歯を食いしばって頑張った。こんな惨烈な体験は、生涯二度とできようか！ 否、二度とあってはならないことだ。

国民政府軍に救われる

やっと高密に到着した頃、ビルマ戦線から転進してきた蒋介石軍の精鋭、アメリカ装備の孫立人將軍麾下の第一軍団が青島に上陸、膠済鉄道に沿って西進中という情報が入った。果たして翌々日には、同軍団の先遣部隊が高密に到着した。われわれは、またしてもこの部隊の部隊長に輸送を懇願した。部隊長は「われわれは『怨みに報ゆるに徳を以てせよ』という蔣委員長 の命令を受けており、日本人帰国者にはできるだけ援助を与える」と言明した。果たして翌日アメリカ製の大型トラック（幌付き）十台を用意してくれた。

こうして済南を出発してから十六日目に青島にたどりつくことができた。途中で、七、八人の子供を亡くした。廃屋となった市内の日本人経営のホテルに分宿し、ようやく生き延びた喜びを嘸みしめた。

しかし半月以上もろくな食事をとっていなかったた

め、母親はお乳が出ない。到着後、三歳以下の乳幼児がバタバタと死亡し、三人の子供を失い半ばは狂乱状態になってしまった母親もいた。私たちは毎日、死亡した子供を粗末な棺に納め、旧青島神社近くの荒れ地に埋葬するのが仕事であった。

我が家でも、生後四カ月の次女が肺炎のため動かすことができずに、引揚船LSTへの乗船を見送り、次の病院船の回航を待つことになった。こうして四月十日過ぎにやっと乗船し、二十一日に博多に上陸した。

人生再建の労苦

祖国の土を踏んで、しみじみと感じたことは、「国破れて山河在り」の杜甫の詩ではないが、自分たちには、帰ることのできる父母の国、祖国があった、ということであった。

次女が重病のため、途中、金沢高田の国立病院の厄介になり、六月によく新潟の郷里に帰ったが、三カ月後に横須賀市にある旧海軍の徴用工の宿舎であった、戦災者・引揚者の寮に移り、以来、この地で人生再建の出発にとりかかった。幸いにまだ三十代の半ば

で働く体力は十分あったものの、お金はなし、食料はなし、薪炭はなし、途方に暮れる毎日であった。

勤めの余暇は、すべて近くの山での薪取りと、さつまいもの買い出しに費やした。子供に学校に行くときに着せる服がない。家内は寝ても起きててももんぺ一つ、私は博多でもらった軍服を染め直して東京に通った。リンゴ箱を横にして板を渡し、一家六人の食卓とした。今では、想像もできないようなどん底生活を十数年送り、ようやく人間らしい生活ができるようになった。時には、既に五十歳を過ぎていた。

こうした個人の小さな忍苦も、日本再建の捨て石になったと思えばむしろ幸せである。

私の青春の思い出

神奈川県 吉山和隆

昭和十八年秋、日本は前年のミッドウェー海戦、ガダルカナルにおける米軍の反攻などを契機として、次

第に重大な局面を迎えつつあったが、東京では時折の町内会の防空演習、灯火管制、主食・繊維製品の統制などを除けば、平穩な日常生活が営まれていた。

当時、私は旧制中学の五年生で、元来のんびり屋であったが、将来の進路を真剣に考えねばならない時期であった。父は南方軍総司令官寺内元帥付通訳としてシンガポールにおり、兄は陸軍技術将校として近々軍務に就くことになっており、残りの家族は母、小学生の妹と弟、就学前の弟と私の五人であった。

その当時は、普通中学卒で職業に就くことはまれで、上級学校に進むことが一般的であり、私も進学を考えたが、家が豊かでないため、私立大学は最初から考えに入れなかった。

そこでまず小手調べの意味も含めて、一般の官立高専などより早く試験が行われる東京高等商船学校、国立大学哈爾浜学院、建国大学に願書を出した。いずれも数十倍の競争率であったが、数日後、高等商船と哈爾浜学院から合格通知書が届いた。

私としては華々しい高等商船に心が動いたが、日本